

年三月卒業予定者の卒業式が年内の十二月二十六日に行われた。

① 校友会解散・報國団結成

『団報』第一号（昭和十六年九月三十日。東京美術学校報國団）に次の記事が掲載されている。

東京美術学校報國團の結成

昭和十六年二月十一日紀元節の佳節を卜し、吾が報國團は式典後華々しく澤田（源一）團長の挨拶があつて結成され次でその規則が成立し、役員が任命されて茲に目出度く報國團が結成されたのである。

抑大學専門學校及び中等學校職員生徒は各學校にあつてそれ／＼の校友會の名の下に獨自の會を組織して、戰時體制に即應しつゝあつたが、文部當局の方針の下に全國的同一組織機構の下に結成されたのである。我々東京美術學校に於ては、特色ある職域に邁往すべく全員の奉仕的精神は日増實行に移されつゝあつて將來の發展期して俟つべきものがある。

その規則と役員は次の通りである。

東京美術學校報國團規則

名稱

第一條 本團ハ東京美術學校報國團ト稱ス

目的

第二條 本團ハ學行一如ノ理想ノ下ニ皇國臣民トシテ負荷ノ大任

ニ堪フベキ人物ヲ鍊成シ以テ校風ノ維持發揚ニ資スルヲ

組織

目的トス

第三條

本團ハ東京美術學校職員及生徒ヲ以テ團員トス
本團ニ左ノ各部ヲ置ク

一、總務部

總務部ハ本團ノ使命タル校風作興、風尙刷新ノ中心トナリ各部ノ事業ニ關シ企畫統制ヲ爲スノ外全般的施設並ニ事業及他部ニ屬セザル施設並ニ事業ヲ行フ

總務部ハ本團ノ庶務及會計ノ事務ヲ掌ル

二、鍊鍛部

鍊鍛部ハ剛健旅行、武道及各種ノ體育運動ヲ行フ

三、國防訓練部

國防訓練部ハ射擊、馬術、海事訓練、防空訓練、滑空訓練、自動車及航空機操縱等ノ國防的訓練ヲ行フ

四、文化部

文化部ハ興亞研究、文學、音樂、技藝、作法等ヲ行フ

五、生活部

生活部ハ保健、共濟、學費、宿所等ニツキ指導斡旋ヲ爲ス

各部ハ必要ニ應ジ更ニ之ヲ班ニ分ツコトヲ得

役員

第四條

本團ニ式ノ役員ヲ置ク

一、團長

學校長之ニ當リ本團ヲ統轄シ役員ヲ任免ス

二、部長及副部長

各部ニ部長一名副部長若干名ヲ置キ^{〔キ〕}教職員中ヨリ之ヲ命ズ

總務部^{〔部長〕}ハ團長ヲ輔佐シ部務ヲ掌理ス

鍊鍛^{〔鍛鍊〕}、國防訓練、文化、生活各部ノ部長ハ當該部務ヲ掌理ス 各部ノ副部長ハ部長ヲ輔佐シ部長事故アルトキハ之ヲ代理ス 鍊鍛^{〔鍛鍊〕}、國防訓練、文化、生活各部ノ部長及副部長ハ總務部理事ヲ以テ之ニ充ツ

三、理事及參事

各部ニ理事及參事若干名ヲ置キ教職員中ヨリ之ヲ命ズ 理事及參事ハ部長ヲ輔佐シ部務ニ參畫シ又ハ部務ヲ分掌ス 理事中ニ常務理事ヲ置クコトヲ得

四、班長

班ニ班長一名ヲ置キ理事中ヨリ之ヲ命ズ

班長ハ當該班務ヲ掌ル

五、主事

總務部ニ主事若干名ヲ置キ教職員中ヨリ之ヲ命ズ

主事ハ庶務會計ニ從事ス

六、部幹事

各部ニ部幹事若干名ヲ置キ生徒中ヨリ之ヲ命ズ

部幹事ハ部長、副部長又ハ班長ノ指導ノ下ニ部務又ハ班務ニ從事ス

七、學級幹事

各學級又ハ數學級幹事若干名ヲ置キ生徒中ヨリ之ヲ命ズ

學級幹事ハ總務部ニ屬シ部務ニ從事ス

役員會

第五條 役員會ヲ分チテ役員總會、各部役員會、各班役員會及總務部理事會トス

役員會ハ團長事故アルトキハ總務部長之ヲ代理ス

第六條 集會ノ決議事項ハ之ヲ議事録ニ記載シ團長ノ承認ヲ受クベキモノトス

會計

第七條 團員中職員ノ團費ハ毎月末俸給月額ノ千分ノ五乃至千分ノ十二ヲ釀出スルモノトシ生徒ノ團費ハ一ケ年金六圓ヲ四月、九月、一月ノ三回ニ分チ其ノ月十五日ヨリ一週間以內ニ納付スルモノトス

第九條 本團ノ經費ハ團費、寄附金、及基本金ノ利子ヲ以テ之ニ

充ツ

團報

第十條 本團ノ團報ハ一年一回以上發行シ團員ニ配付スルモノトス

各部通則

第十一條 各部ニ部員名簿、備品簿、整理簿及會計簿並ニ行事ノ記錄ヲ備付ケ毎年四月總務部ニ提出檢閲ヲ受クモノトス

第十二條 各部ノ細則ハ團長之ヲ定ム

附則

第十三條 本規則ハ昭和十五年十二月一日ヨリ之ヲ施行ス

東京美術學校報國團役員一覽

團長 澤田 源一

總務部

部長 藤島 武二

副部長 佐々木 卓

理事 結城 貞松

六角注多良

津田 信夫

建昌彌一郎

南 薰造

石田 英一

小泉 勝爾

高村 豊周

大澤三之助

常務理事

結城 貞松

佐々木 卓

參事

森田龜之助

筒崎 謙齋

齋藤 幸晴

石澤 正男

富永 惣一

主事

豐田朝一郎

中村 傳治

佐藤 重吉

瀨谷 義廣

平塚 運一

玉木 磐根

瀨谷 義廣

平塚 運一

北浦 大介

森井 健介

佐々木 卓

清水 龜藏

朝倉 文夫

和田 三造

田邊 至

海野 清

廣川松五郎

三橋 利三

森井 健介

津田 信夫

和田 三造

宮本 純一

鎌倉芳太郎

沼田勇次郎

平野 茂

原田謹次郎

豊田朝一郎

中村 傳治

多賀谷健吉

小林 萬吾

矢代 幸雄

北村 西望

香取秀治郎

森田龜之助

關野金太郎

松田 義之

多賀谷健吉

香取秀治郎

北浦 大介

高橋 吉雄

小塚新一郎

木村得三郎

新 規矩男

矢崎 好幸

佐々木 孔

佐々木 孔

佐々木 孔

玉木 磐根

庶務班

班長 宮本 純一

主事 玉木 磐根

班付 細野 明子

會計班

班長 筒崎 謙齋

主事 佐藤 重吉

班付 野末 武

團報班

班長 松田 義之

參事 鎌倉芳太郎

講演映畫班

班長 朝倉 文夫

參事 沼田勇次郎

鍛鍊部

部長 結城 貞松

副部長 北村 西望

理事 水谷 武彦

參事 豐田朝一郎

深瀬 嘉臣

關野 克

橋本 統陽

村內 政雄

柔道班

野川不二子

瀨谷 義廣

片山 米藏

石澤 正男

武田 壽

新 規矩男

海野 清

伊原宇三郎

丸山 義男

正木 篤三

石橋啓十郎

矢澤 貞則

本多 利時

山脇 洋二

川合 清

山脇 洋二

山脇 洋二

山脇 洋二

山脇 洋二

山脇 洋二

山脇 洋二

班長 丸山 義男
參事 大江 雄五
劍道班

班長 豐田朝一郎
參事 橋本 統陽
弓道班

班長 水谷 武彦
參事 關野 克

班付 佐々木一郎
體育運動班

班長 伊原宇三郎
國防訓練部

部長 和田 三造
副部長 關野金太郎
理事 金澤 庸治

參事 松田 權六
西間木久郎

射擊班

班長 齋藤 幸晴

馬術班

班長 豐田朝一郎

防空訓練班

班長 八田辰之助

グライダー班

班長 松田 義之

文化部

部長 津田 信夫

副部長 南 薰造

理事 山崎覺太郎

磯矢 陽

參事 常岡 文龜

白川 一郎

興並研究班

川崎 隆一

文藝班

班長 內藤 春治

音樂班

班長 村田 良策

職能班

班長 西田 正秋

作法班

班長 山崎覺太郎

生活部

部長 磯矢 陽

副部長 森井 健介

理事 田邊 至

森田 武

高村 豐周

西田 正秋

村田 良策

澤口 悟一

羽野 禎三

加藤鬼頭太

內藤 春治

小場 恒吉

蔦田 宗次

大峽 秀榮

參事 松垣 靄雄 山田 廉

岡 四郎 岡田捷五郎

濱野 太吉

保健班

班長 森田 武

班付 佐々木總一郎

共濟班

班長 入谷 昇

これより先き、昭和十五年十月一日の専門学校長会議において文部大臣は、今回の日独伊三国条約の締結に当たって渙発せられた詔書の趣旨に添って「上下一體一心ノ國內體制ヲ完備シ、國體ノ本義ニ徹シテ不動ノ信念ト不屈ノ意志トヲ以テ全國民ガ各自ノ業ヲ通シテ奉公ノ實ヲ舉ゲルコトニ精進」し、「大義ヲ世界ニ宣布シ正シキ平和ノ確立ヲ目指シテ大東亞新秩序建設ニ邁往スル」べき時であるから、教育の任に当たる者は特にこれを自覚して「時局ノ變轉推移ニ對スル透徹セル識見ヲ養ヒ、分ニ應ジテ一意國ニ報ズルノ誠ヲ致シ、先達トナツテ學徒ヲ率キ、師弟同行ヨク學校ヲシテ眞ニ教學修練ノ道場タラシムル」べきであるという訓示をなし、修練組織強化について審議するよう促した。そして、各学校が「修練道場タルノ體制ヲ確立」するために再組織すべき団体の基準を示した。

東京美術学校報國團は全くこの訓示と基準に則って編成されたもので、その名称から各部、役員の編成に至るまで、本校の独自性というものは窺えない。かくて明治二十四年の創立以来五十年近い歴

史を持つ東京美術学校校友会はその幕を閉じ、同時に左記の文が示すような重苦しい緊迫した空気が支配するようになった。

本校報國團組織揭示ノ件

生徒一般

今ヤ興亞ノ聖業中道ニシテ皇國ノ使命愈々重大ナル前古未曾有ナリ 此ノ難局ニ際會シ青年學徒ノ責任ノ容易ナラサル言ヲ俟タス 須ラク學藝ノ研鑽鍊磨ト行止ノ嚴整濶達ト相俟チ學行一如ノ理想ノ下ニ師弟相携ヘテ俱學俱進以テ有爲ノ材幹ヲ陶冶鍊成シ國家ノ負託ニ任フヘキナリ

茲ニ其ノ一方途トシテ校友會ノ組織ヲ改メ現下重要ナル修練施設ヲ強化シ教職員生徒ヲ打ツテ一丸トスル團體タラシメ其ノ活動ヲ一元的且有機的タラシメントス 而シテ此團體ノ指導精神トスルトコロハ自我功利ノ思想ヲ排除シ報國精神ニ一貫スル校風ヲ樹立スルニ在リ

コノ趣旨ニヨリ東京美術學校報國團ヲ結成シ其規則組織ヲ左ノ通り定ム〔下略〕

次に報國團の活動内容であるが、記録資料としては前出の『團報』第一号と「昭和十六年一月〔以降〕報國團関係書類綴 庶務掛」および「昭和十六年度〔以降〕報國團書類 會計班」各一冊が現存し、これらによって戦後までの活動の一端が把握できる。記録は昭和二十年十一月十三日起案戦死者弔辞案（報國團長上野直昭）で終わっており、団が解散した日時は不明である。以下、その概況を記す。

昭和十六年二月二十一日

役員会を開き、本団事業その他について協議。

同年五月九日

役員会を開き、本団予算編成について協議。

同年同月十三日

常務理事会を開き、本団予算編成について協議。

同年

文芸班より次の報告書を提出。

文芸班古美術見學報告

一、対象 國寶 愛染明王画像 壹幅 絹本着色 鎌倉末期

一、場所 上野公園内 護國院（美校裏隣り）

一、時日 昭和十六年五月廿一日（水）午後四時ヨリ

一、人員 有志美校生五十一名

一、費用 拜觀謝禮金貳圓也ヲ文芸班費ヨリ支出

以上

右引率指導者 文化部理事 西田正秋〔印〕

東京美術學校報國團長澤田源一殿

同年六月四日

興亜研究班より次の届けを提出。

講演會開催届

来ル六月十三日左記ノ如ク本班事業ノ一部トシテ講演會開催致

度候ニ付御許可相成度此段御届申上候也

日 時 六月十三日（金）午後一時ヨリ

場 所 本校講堂

講演題目 佛印ニ就テ

講演者 伊原宇三郎氏

昭和十六年六月四日

右興亜研究班長 内藤春治〔印〕

東京美術學校報國團長 澤田源一殿

同年六月三十日

生徒役員を任命。

総務部幹事

佐藤保（日、四）伊藤正規（油、三）石塚軍治（塑、三）石

山彰（図、四）大久保光暉（彫金、四）

学級幹事

加藤東一（日、予）武田照淳（日、一）齋藤忠夫（日、二）

月岡栄吉（日、三）伊藤耕（日、四）座間敏夫（油、予）越

智雄二（油、二）庄司栄吉（油、三）舟木徳重（同）志村正

雄（同）田代利夫（油、四）滝川博（塑、予）玉那覇正吉

（塑、一）片岡進（塑、二）今村重久（塑、三）向井良吉

（塑、四）吉岡侃一（木、一）難波孫次郎（木、三）中川清

徳（工芸、予）伊藤守正（図、一）山県勇一郎（図、二）加

藤元男（図、三）藤形一男（図、四）田中勇（彫金、二）松

本正照（彫金、三）那賀清彦（鍛、二）川岸登（鍛、三）近

- 藤隆定（鑄、二） 蒔田広（鑄、三） 山田清司（漆、二） 田中寿雄（漆、三） 長大作（建、予） 木下日出男（建、一） 小西汎（建、二） 鈴木一郎（建、三） 池田忠彦（建、四） 岩田順三（師、一） 森本宏（師、二） 三橋文雄（師、三）

同日

能芸術班設置願ひ提出される。

能芸術班設置願

現下ノ非常時局ニ當リ我芸術家ニトツテ最モ緊要ナルコトハ芸術ヲ通シタ日本精神ヘノ復歸デナケレバナラヌト信ズルモノデアリマス

新ラシキモノヘノ追及ハ云フニ及バズ古キ傳統ト芸術ニ対スル理解コソ明日ヘノ限リナキ飛躍ヲ約束スルデアリマシ「ヤ」フシ亦此ノ芸術ヲ更ニ後世ニ傳ヘルコトハ我々ノ義務デアリマス抑我武士道精神ヲソノ眞髓マデ表現シタ芸術トシテノ能ハ世界ニソノ比ヲ見ザルコトハ吾人ノ等シク認メル處ト確信スルモノデアリマス

斯カル見地カラカ最近トミニ青年ノ間ニ能研究ノ氣運ノ澎湃トシテ起リツ、アルコトハ當謠曲部員ノ激増振ヲ見テモ容易ニ首肯出ル處デアリマス 能及ビ謠曲研究コソ本校生ノ常識トシテ又精神的修養鍛鍊ノ糧トシテ各科ヲ問ハズ何人トイヘドモ當然知ラネバナラス教養デアルト信ズルモノデアリマス

然ルニ此度報國團ノ結成ニ當リ我々ノ等シク痛感致シマスコトハ斯カル時勢ニ於テコソイヨイヨ以テ本謠曲部ノ持ツ意味ノ重

大ナルコトデアリマス 然シテ本部本来ノ目的ガ十二分ニ發揮サレルモノト確信イタシマス

以上現下ノ氣運ニ鑑ミ部長並ニ團長ノ絶大ナル御讚同ニ依リ本部ノ設置ヲ御承認被下度 此段以連署御願申上マス

責任者 油、一 阿部寛壽

音楽班長 西田 正秋

文化部理事 文化部理事 村田 良策

文芸班長 村田 良策

會員 建、四 大森 朝男

同 西野 達二

同 阿部 彌彦

建、三 武田 秀雄

建、予 遠藤 雄二

鍛、四 河内 三郎

鍛、一 谷口 欣也

彫、二 神谷 静雄

彫、一 高橋 武

鑄、一 福井 良之助

同 西村 純一

塑、三 山本 民二

塑、一 坂 青嵐

報國團文化部長 津田信夫殿
報國團長 澤田源一殿

同 澤野 基良

同 城下 久實

木、子 木本 博之

漆、一 津田 祐作

日、二 山田 勝治

油、一 沖 進

師、二 堀口 千鶴雄

卒 川合 清

師、一 宮脇 憲三

師、三 荒閑 芳一

同 大浦 正男

同 矢口 武

（以上各捺印）

同年七月八日常務理事会開催

グライダー班を新設すること、体育運動班の中にラグビー部、水泳部を設けること、能芸術班の新設は却下し、音楽班ないし文芸班中に含めることその他を決議。

同年八月八日から一週間

千葉市の帝大検見川農場で開かれた文部省主催高等専門学校集団労働作業学徒講習会に団より座間敏夫（油、予）児島徹郎（漆、一）長井皇道（建、一）梅沢一雄（師、三）の四名が参加。

同年九月三十日

『団報』第一号発行。編集兼発行人は松田義之。内容は貴族院議員・男爵大蔵公望の講演録「東亜新秩序建設は果して可能なりや」、助教伊原宇三郎の論説「佛印紀行」、講師小塚新一郎の論説「独逸より帰りて」、各班の活動報告、団関係記事から成る。

編者は第一号（田中勇氏寄贈）以外は未見で、続刊の有無については未詳である。

同年十月

朝倉文夫が文化部作法班使用の茶室用建物修理（倶楽部内模様替え）の費用六百元を寄付。

十六年十二分報国団収入

五二円三九銭 十二分職員部団費
一八円 同 生徒部団費
二一円七五銭 倶楽部席料収入

二〇円 団報掲載広告料収入

一六円八〇銭 大根買却代収入

計一二八円九四銭

十六年中

東京第二陸軍病院へ傷病兵を慰問。

十七年三月

統制会社より配給された彫金、鍛金部生徒実習用銅板類代金として報国団基本金を立替える。

十七年七月 役員改選

七月二十四日起案
総務部

部長 森井 健介

副部長 佐々木 卓 北浦 大介

参事 大友 春松 瀬谷 義広 鈴木鉄太郎

浦野 雙観 下村 英時 白川 一郎

玉木 磐根

企画班長 佐々木 卓

同班参事 宮本 純一 大友 春松 高橋 吉雄

同班 付 佐々木総一郎

庶務班長 北浦 大介

同班参事 鈴木鉄太郎 玉木 磐根

会計班長 北浦 大介

同班参事 大友 春松 瀬谷 義広 浦野 雙観

筒崎 謙斎
 同 班 付 佐々木一郎
 団報班 参事 下村 英時
 同 班 付 斎藤 春子
 講演映画班 森田亀之助
 同 班 参事 白川 一郎
 勤勞作業班 佐々木 卓
 同 班 参事 宮本 純一
 同 班 付 佐々木総一郎
 鍛錬部長 北村 西望
 同 部 理事 平井小二郎
 同部剣道班 平井小二郎
 銃剣道班 平井小二郎
 国防訓練部
 部 長 多賀谷健吉
 理 事 金沢 庸治
 参 事 川合 清
 射撃班 長 平井小二郎
 馬術班 長 金沢 庸治
 防空訓練班 付 片山 米蔵
 海軍訓練班 長 山脇 洋二
 滑空訓練班 長 松田 義之
 同 班 参事 川合 清
 文化部
 部 長 南 薫造

高橋 吉雄
 平井小二郎
 武田 寿
 山脇 洋二
 大野 慶蔵
 鈴木 正

生活部

部 長 田辺 至
六月二十五日提案
 総務部幹事

岡部敏也(日、三) 芳賀準録(油、二) 神野義衛(木、三)
 佐原雄次郎(図、二) 鬼沢美濃作(師、二)

学級幹事

飯野隆司(日、予) 金子省吾(日、一) 武田照淳(日、二)
 斎藤忠夫(日、三) 岡博(日、四) 安保健一(油、予) 森田
 信夫(油、一) 浜田邦男(油、四) 松本富二(油、二) 深見
 公道(同) 田中正道(油、三) 橋本茂(同) 村井真一(塑、
 予) 滝川博(塑、一) 玉那覇正吉(塑、二) 片岡進(塑、三)
 今村重久(塑、四) 高橋剛(木、一) 杉村尚(塑、三) 吉田
 左源二(工芸、予) 松本博臣(同) 伊藤長男(図、一) 伊藤
 守正(図、二) 正木直彦(図、三) 桜井俊男(図、四) 伊藤
 義七(彫金、二) 田中勇(彫金、三) 香取臣世(鍛、二) 那
 賀清彦(鍛、三) 西村純一(鑄、二) 近藤隆定(鑄、三) 彼
 谷良一(漆、二) 山内清司(漆、三) 伊藤得時(建、予) 長
 大作(建、一) 木下日出男(建、二) 小西汎(建、三) 伊藤
 高保(建、四) 若林稔(師、一) 磯谷俊治(同) 岩田順三
 (師、二) 武内和夫(同) 森本宏(師、三) 石川宣俣(同)

同年十月三十日

事業費五百円を学校報国団本部より支給される。

同年十一月二十六日

帝国在郷軍人会東京美術学校分会(分会長大沢三之助)解散に

つき剰余金四十九円余を寄付される。

同年十二月八日

文部省の指示に基づき大東亜戦争第一周年記念行事を挙行。午前九時、職員生徒一同大講堂に参集し、宮城遥拝、靖国神社遙拝、君が代斉唱、詔書奉読、学校長訓示、伊原宇三郎助教授および矢沢弦月講師による南方占領地視察談、戦捷並びに出征将兵の武運長久祈願、護国の英霊に対する感謝黙禱を行い、午後は生徒代表は靖国神社における祈願祭に参列、それ以外の生徒は防空訓練予習を行う。

十八年三月二十日

事業費補助金五百円を学校報国団本部より支給される。

同年五月役員改選

— 学級幹事

- 岡部敏也(日、四) 武田照淳(日、三) 金子省吾(日、二)
榎本健一(日、一) 稲木厚生(日、予) 奈良春生(油、四)
赤松克己(油、三、小林教室) 塚原栄一(同、南教室) 高井寛二(同、田辺教室) 森田信夫(油、二) 大溝裕史(油、一)
小林炳(油、予) 片岡進(塑、四) 玉那覇正吉(塑、三) 滝川博(塑、二) 村井真一(塑、一) 林保次郎(塑、予) 宇佐美正弘(木、三) 熊谷博(木、一) 松永和夫(図、四) 伊藤守正(図、三) 中川清徳(図、二) 山本敏郎(図、一) 石川進(図、予) 田中勇(彫金、四) 仁藤義七(彫金、三) 飯野紀雄(彫金、二) 緒方正祥(彫金、一) 西村純一

- (鑄、三) 西大由(鑄、二) 香取臣世(鍛、三) 金田正士
(鍛、二) 佐藤進(漆、三) 大崎千之(漆、二) 大岡健一
(漆、予) 曾宮俊一(建、四) 木下日出男(建、三) 長大作
(建、二) 伊藤得時(建、一) 加藤寅正(建、予) 岩田順三
(師、三) 若林稔(師、二) 石川勇(師、一)

十九年三月

団員松本博臣戦死につき弔辞を贈る。

同年六月

上野直昭校長が報国団長となる。

同年十一月十四日

団員大塩麟太郎戦死につき弔辞を贈る。

二十年六月一日

団員伊沢洋戦死につき弔辞を贈る。

同年十一月十三日

団員石井正夫戦死につき弔辞を贈る。

⑫ 工芸技術講習所

本校工芸科鑄金部教授津田信夫をはじめとする工芸界の有力者たちの間には、産業としての工芸、芸術としての工芸の両面を踏まえ、新たな認識に基づいた教育、研究機関を設置したいという念願があった。この念願は昭和十四年十一月六日、本校に対して八島玉仙より市内王子区袋町の土地(赤羽練兵場の北)約二千坪寄附の申し